

金魚売り

小川未明

青空文庫

たくさんな金魚きんぎよの子こが、おけの中なかで、あふ、あふとして泳およいで
 いました。体からだじゆうがすつかり赤あかいのや、白しろと赤あかのまだらのや、
あたま頭のさきが、ちよつと黒くろいのや、いろいろあつたのです。それを
まえ前うしと後ろうしに二つのおけの中なかにいられて、肩かたにかついで、おじいさん
 は、春はるのさびしい道みちを歩あるいていました。

このおじいさんは、これらの金魚きんぎよを仲買なかがいや、卸屋おろしやなどか
 ら買かつてきたのではありません。自分じぶんで卵たまごから養ようせい成せいしたのであ
 りますから、ほんとうに、自分じぶんの子供こどものように、かわいく思おもつて
 いたのです。

「これを売うらなければならぬとは、なんと悲かなしいことだろう。」

こう、おじいさんは思おもったのでした。

春はるの風かぜは、やわらかに吹ふいて、おじいさんの顔かおをなで過すぎました。道端みちばたには、すみれや、たんぽぽ、あざみなどの花はなが、夢ゆめでも見みながら眠ねむっているように咲さいていました。あちらの野原のほらは、かすんでいました。

いろいろの思おもいで、おじいさんの頭あたまの中なかにあらわれて、笑わらい声こえをたてたり、また悲かなしい泣なき声こえをたてたかと思おもうと、いつのまにか、跡あとも形かたちもなく消きえてしまつて、さらに、新あたらしい、別べつの空くう想うが、顔かおを出だしたのです。

人家じんかのあるところまでくると、おじいさんは、

「金魚きんぎよやい、金魚きんぎよやい——。」と、呼よびました。

子供たちが、その声を聞きつけて、どこからかたくさん集まっています。その子供たちは、なんとなく乱暴そうに見えました。金魚の泳いでいる中へ棒をいれて、かきまわしかねないように見えました。おじいさんは、そうした子供たちには、売りたいとは思いませんでした。

「きれいな金魚だね。」

「僕は、こいのほうがいいな。」

「こいは、河にすんでいるだろう。」

「いつか、僕、釣りにいったら、大きなこいが、ぱくぱく、すぐ僕の釣りをしている前のところへ浮いたのを見たよ。」

「赤かったかい。」

「黒くろかった。すこし、赤あかかった。」

「うそでない。ほんとうだ。」

その乱暴らんぼうそうな子供こどもたちは、もう金魚きんぎよのことなんか忘れてしまつて、棒ぼうを持つて、戦争せんそうごっこをはじめたのです。

おじいさんは、笑い顔わらをがおして、子供こどもたちが無邪氣むじゃきに遊あそんでいる

のをながめていましたが、やがて、あちらへ歩あるいてゆきました。

村むらを離はなれると、松まつの並木なみきのつづく街道かいどうへ出でたのであります。そ

の松まつの木の根ねに腰こしをかけて、じつと、おけの中なかにはいつているた

くさんな金魚きんぎよの姿すがたをながめていました。こうして、おじいさん

は、自分じぶんの育そだてた金魚きんぎよは、残のこらず目めの中なかに、はつきりとはいつ

ていたのでした。

ながみち
長い道をおじいさんにかつがれて、知らぬ町から町へ、村から
むらあいだ
村へゆく間に、金魚は、自分の兄弟や、友だちと別れなけ
きんぎよ
ればなりませんでした。そして、それらの兄弟や、友だちと
えいきゆう
は、永久に、またいつしよに暮らすこともなければ、泳ぐこ
じぶん
ともなかつたのです。もとより自分たちの生まれて、育てられた
こきよう
故郷の小さな池へは帰ることがなかつたでしょう。

きんぎよ
金魚は、なにもいわなかつたけれど、おじいさんは、よく、
きんぎよ
金魚の心持ちがわかるようでした。あまり長い、毎日の旅
なか
にゆられて、中には、弱った金魚もありました。そんなのは、
よわ
べつうつわなか
べつうつわなか
別の器の中にいれて、みんなと別にしてやりました。なぜなら、
げんき
達者で、元気のいいのがばかにするからです。そのことは、ち

ようど人間の社会におけると違いがありません。弱いものに
対して、憐れむものもあれば、かえつて、それをあざけり、いじ
めるようなものもありました。

おじいさんは、おけに鼻を打たれたり、また揺られたために弱
った金魚をいつそうかわいがつてやりました。

ある日のこと、おじいさんは、金魚のおけをかついで、「金
魚やい、金魚やい——。」と呼びながら、小さな町へはいつ
てきました。

そのとき、十二、三になる少年が、とある一軒の家から飛
び出してきて、いきいきとした目でおじいさんを仰ぎながら、
「金魚を見せておくれ。」といいました。

おじいさんは、おとなしい、よい子供だと思ひましたから、
 「さあ、見てください。」と、答えて、おけをおろして見せまし
 た。

少年は、二つのおけの中にはいつている金魚を熱心に
 見くらべていましたが、おじいさんが別にしておいた、弱つた金
 魚へ、その目を移したのです。

「この円い、尾の長い金魚をくださいな。」と、子供はいいま
 した。

「坊ちゃん、この金魚は、いい金魚ですけれど、すこし弱つ
 ていますよ。」と、おじいさんは、目を細くして答えました。

「どうして弱っているの？」

「長い旅ながたびをして頭あたまをおけで打うって疲つかれているのですよ。」

おじいさんは、やさしい、いい子供こどもだと思おもって見みていました。

「僕ぼく、大だいじ事じにして、この金魚きんぎよを飼かってやろうかしらん……。」

「そうしてくだされば、金魚きんぎよは喜よろこびますよ。」と、おじいさん

はいいました。

子供こどもは、円まるい尾おの長ながい、赤あかと白しろのまだらの金魚きんぎよを買かいました。

そのほかに二、三さんびき買かって家うちの中なかへ入はいろうとして、

「おじいさんは、また、ここっちへややつてくるの？」と、少しょう年ねん

は聞ききました。

「また、来らい年ねんきますよ。そして、金魚きんぎよがじじょうぶでいるか、

お家うちへいつてみますよ。」といいました。

少年しょうねんは、うれしそうにして、金魚きんぎよをいれ物ものにいれて、家うちへはいりました。おじいさんは、かわいがっていた金魚きんぎよの行く末すえをおもいながら、人ひとのよさそうな顔かおに笑いわらをたたえて、荷にをかつぐと子供こどものはいった家うちの方ほうを見かえりながら去さったのでした。

「金魚きんぎよやい、金魚きんぎよやい——。」という声こえが、だんだん遠とほざかつてゆきました。おじいさんは、それから、いろいろの町まちを歩き、また村むらをまわつて、春はるから、夏なつへと呼び歩あるいたのです。こうして、自分じぶんの育てた金魚きんぎよは、方々ほうぼうの家うちへ買かわれてゆきました。

おじいさんから、弱よわつた金魚きんぎよを買かった子供こどもはその金魚きんぎよをいたわつてやりました。金魚きんぎよは、急きゆうに、みんなから離はなれて、さびしくなつたけれど、静しずかな明あかるい水みずの中なかで、二、三の友ともたちとい

つしよにおちつくことができただので、だんだん元氣を恢復して
 きました。そして、五日たち、七日たつうちに、もとのじようぶ
 な体となつたのであります。

金魚は、水の中から、庭さきに、いろいろの咲いた花をなが
 めました。また、ある夜はやわらかに照らす月の光をながめまし
 た。自分たちをかわいがってくれた、おじいさんの顔はふたたび、
 見ることはなかつたけれど、少年は毎日のように、水の中を
 のぞいて、餌をくれたり、新しい水をいれてくれたり、しんせつ
 にしてくれたのであります。金魚は、だんだんおじいさんのこ
 とを忘れるようになりました。

夏が過ぎ、秋が逝き、冬となり、そしてまた、春がめぐつてき

ました。

ある日のこと、少年は、外にあって、

「金魚やい、金魚やい——。」と、いう呼び声を聞いたので
す。

「金魚売りがきた……。」と、いって、彼は、すぐに、家の外へ
飛び出てみました。心のうちで待っていた、去年金魚を買
たおじいさんでありました。

顔を見ると、おじいさんは、にっこり笑いました。

「坊ちゃん、去年の金魚は達者ですか？」と聞きました。

おじいさんは、この子供が、弱った金魚を大事に育てようとい
って、買ったことを忘れなかったのです。

「おじいさん、金魚は、みんなじょうぶで、大きくなりましたよ。」と、少年は答えました。

「どれ、どれ、私に見せてください。」と、いって、おじいさんは、山吹の花の咲いている庭さきへまわって、金魚のはいっている大きな鉢をのぞきました。

「よう、よう、大きくなった。」といつて、おじいさんは喜びました。

少年は、おじいさんから、二ひき金魚を買いました。おじいさんは、別に一ぴきいい金魚をくれたのです。

「おじいさん、また来年こつちへくるの？」と、別れる時分に、少年が聞きました。

「坊ちゃん、^{たっしや}達者でしたら、また、まいりますよ。」と、おじいさんは、^{こた}答えました。けれどかならずくるとはいいいませんでした。おじいさんは、^{とし}年を取ったから、もうこうして^{ある}歩くのは^{なんぎ}難儀となつて、^{しず}静かに、^{こきよう}故郷の^{はたけ}圃で^{はな}ばらの花を造つて^く暮らしたいと思つていたからであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

初出：「赤い鳥」

1927（昭和2）年6月

※表題は底本では、「金魚《きんぎよ》売《う》り」となっています。

※初出時の表題は「金魚売」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2014年1月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

金魚売り

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>